音 楽・表 現

■語る会に向けての検討の経緯■

第１回　5月25日

・各指導要領を読んでいくことの必要性を確認。・中学校までに育てておきたい小学生の力にはどんなものがあるか。
・幼・小・中のカリキュラム（扱う題材）のマトリックスを作る。　・教員の交流を促進したい。

○今後の見通しと，今年度実施できそうな実践について話し合った。
・中学校と小学校の４名の教員で交流・実践を深めたい。・行事や音楽会，部活など早く見通しを持ち交流のための整備を進めたい。※中学３年選択音楽「ミニコンサート」９月１３ー１５日にランチルームにて授業を実践したい。

第２回　6月21日

・「幼稚園での音楽的な活動」・小学校の題材配列表・中学校の題材配列表を持ちより，全体を大きく見て話し合った。
・９月に行う中３と小６の合同音楽授業実践について，中学校側の教諭から構想が説明された。
３年選択音楽「ミニコンサートをプロデュース」について

第３回　8月29日

○11年間の題材配列を見ながら意見を出し合い，連続性や継続性についての整合性を考え今後の改訂に向けて検討を行った。
○9月の交流授業について
・細案と役割分担をし内容を確認しあった。　・指導案の検討を行い書式等を決めた。

第４回　9月26日

1　実施した交流学習についてのふり返り
教育楽器ではない自分の好きな楽器を演奏できる。苦手意識を持った児童もプラス思考を持つことができた。楽しみになってきた。等々の感想があった。
小６がまず前を向いてくれることに中３は感動し，すごく聞いてくれたという気持ちがあった。等々
2　将来的な見通しについて，・小学校の音楽会に幼の園児が聞きにいくのは可能・小６が中学校の音楽会を聞きにいく。今後の可能性を検討したい・将来的には合同音楽会が実現するとすごいと思う。等を検討した。

第５回　10月11日

・子どもの様子を見るという視点からお互いの授業を見合う計画を立てた。
・11月15日幼稚園の「こども祭り」（参観日）に音楽的なものを入れてみてはどうか。
園児の演奏を聞き，小学生はお返しに歌ったり鍵盤ハーモニカを吹いたり。

第６回　10月24日

○リコーダーアンサンブルの授業について小中の児童・生徒の様子やそれぞれの学習目標について
・12/1の本時までの１回目の交流授業についての具体的な内容についての検討
・指導案，リードについて　指導案は小林教諭　リードは今岡教諭が完成版を提示する。
○　11年間を通して<器楽>における大きな流れを把握したい。

第７回　11月8日

○指導案，教科リードの最終検討と当日の役割分担の確認　○分科会の持ち方（分担や時間配分）や前日準備の確認等
○大学協力員からの助言聴取と進行の確認等

第８回　12月15日

○「語る会」の記録の確認と反省のまとめ
○３学期の交流授業の計画について
・小４と中２の授業の実践と時期について確認
・小学校の音楽会への関わりについて

幼小中一貫教育に向けて（音楽・表現）

1　現状と課題

現在の幼稚園のくらしや小・中学校での音楽科の授業，音楽に関わる生徒の様子を概観したときに次のような実態や課題が伺われる。

幼稚園では，

○　日常的に音楽に触れているが，みんなで集まって歌う場面だけでなく，見つけたあそびの中で楽器遊びをしたり，音楽に合わせて体を動かしたり，集団遊びの中で遊び歌を歌ったりしている。

○　言葉に自分で節を付けたり，蝶を見て「ちょうちょう」を歌ったりする姿が見られ，自分の気持ちを自由に表現したり，自分の知っている歌で表現している。一方で「歌はきちんと歌うもの」という固定観念を持っていて，自由に身体表現ができにくい子どももいる。

○　音楽に関わる習い事をしていて，ピアノを弾いたり，楽譜を読んだりできる子どももいる。

○　入園当初や進級当初など気持ちが不安定なときは，みんなで歌を歌ったり，体を動かしたりすることができにくい子どももいる。環境になれてくると楽しめるようになる。

○　友だちと一緒にふざけて怒鳴り声や大声で歌う子どもがいる。自由な表現も認めつつ，発達に応じて，きれいな歌声や曲にあった歌い方にも気づかせたい。

小学校では，

○　全学年において，おおむね音楽の時間を楽しみにし，生き生きとした様子で音楽活動に参加しようとする児童が多い。

○　リコーダー検定員制度があるため，それを目標に３年生時から熱心に取り組む児童がいるため，技術的にリコーダーにおける全体的なレベルは高い。その反面，興味のもてない児童との差が大きく，そういった児童に対しての支援が必要となってくる。

○　学校以外の場所で，ピアノをはじめとした音楽関係の教室等に通っている児童が多く，そういった児童の中には，かなりの技術をもっている子がいる。

○　学年によって異なるが，音楽科の授業時数が限られているため，その中で興味関心を高め，効果的に学習できる題材の創意工夫が必要である。

○　音楽科の大切な成果の発表の場でもある，校内音楽会や松江市小中連合音楽会等に関わる時数確保が難しい。

中学校では，

○　ピアノをはじめとして音楽の習い事をしている生徒が多く，音楽の授業への興味関心は比較的高い。従って生徒の興味関心が高まる教材やカリキュラムの開発が必須であると考えられる。

○　学年が進むにつれ表現（特に合唱）に対する意欲が高まる生徒が多く，自己の確立とともに自分と音楽の関わりを発見し，将来的にも楽しんでいこう，音楽に関わる道に進もうとする生徒も多く現れるようになる。

○　上記の様子から，幅広いジャンルの音楽体験を系統的に学習できるカリキュラムの開発，優れた生の演奏にできるだけ多く触れる機会を持たせることが大切であると考えられる。

○　その他，以下のような課題が考えられる。

・読譜力が弱い生徒に対しての支援。
・小学校のSR検定のシステムを中学校でのARシステムとして開発導入。
・音楽関係の楽器，教材，資料の充実と共有化。
・学部との連携や音楽を専攻する大学生との関わり。実践的な技術指導や体験の場の拡大。

2　幼小中一貫教育に向けて大切にしたいこと

これらの現状や課題を受け，音楽・表現では次のような点を大切にしていこうと考える。

○　基礎基本の確実な定着と音楽を愛好しようとする心情を大切にして伸ばしていきたい。

○　一貫教育のカリキュラムの中では児童・生徒が高学年の生徒にあこがれや夢をもてるような場や姿を示せるようにしたい。特に幼稚園においては，小学生・中学生の音楽活動を見たり聴いたりする機会を持ち，豊かな感性をもったり，あこがれの気持ちをもったりできるようにしたい。

○　表現することが楽しい，自分の表現を見たり，聴いたりしてもらうことがうれしいと思えるような経験を幼児期から積み重ねていきたい。

○　友達や後輩，先輩の演奏を聴きながら，認め合い，励まし合い，高め合うことのできる児童・生徒を育てていきたい。

○　優れた芸術に出会ったときに，そのよさに共感し心が揺さぶられるような確かな感性を育てていきたい。

○　音楽に関わる学校行事（音楽会や鑑賞会等）を大切な柱としてとらえ，幼・小・中間の教諭，生徒・児童の相互交流を計画的に実施していきたい。

○　児童・生徒の発達や実態に即して，子どもたちの関心をひきつける授業展開・指導カリキュラムを開発するとともに，児童・生徒の興味関心を大切にした教材選択や選曲をし，生き生きとした授業展開をめざしたい。そのために附属校間の鑑賞資料や楽器・楽譜等を整理し，相互に連携・連絡しながら系統性のある資料を整理・管理したい。

以上のような課題や願いを一貫教育の中で考えていきたい。

スタートしたての実践ではあるが，今回は異学年の交流授業のひとつの実践として，リコーダーによる小学４年生と中学２年生選択の交流授業を公開する。リコーダーを始めて２年目の小学４年生にとっては，課題の項で述べたように，苦手意識の芽生えはじめた児童・個々に技術的な格差が現れ始めた頃でもある。そんな児童が中学２年生の生徒（男女混合）と共に学習することで，自信を回復したり，将来の夢や希望をもてたりする場とし，今後の意欲につなげたい。そういった意味では，同じく前述の「興味をもてなくなった児童への支援」にもつながるものであると考えられる。もちろん，リコーダーが得意な児童にとっても，音楽の表現の広がりやアンサンブルの楽しみを実感でき，これからの学習意欲の高まりにつながるようにしたい。また，中学２年生にとっては，新鮮な場で新たな感動を得たり，時には教えたりすることによって，自分の技術の確認やコミュニケーションの力，全体をまとめる力や自己を振り返る大切な場となることを期待している。

＜表現：器楽＞における幼・小・中の題材配列については，別紙に記載する通りである。尚，今回示す題材配列においては現行のものであって，一貫教育を前提としているものではない。今回の語る会での意見や教授を参考に今年度末に完成させ，来年度以降実施・検証し，修正をしていきたい。

小学４年２組音楽・中学２年選択音楽　学習指導案

指導者　T1　小林佳子
T2　今岡正治

1　題材名　　ふしを重ねて楽しもう　～　リコーダーアンサンブルを楽しむ　～

2　授業の構想

(1) 小学校には，リコーダー検定員制度がある。３年生からリコーダー学習を始め，『笛はともだち』というオリジナルテキストによって，卒業までに検定員を目指している。休憩時間や授業，又は家庭において自主的に練習を重ね，合格するまで何度も挑戦する姿が見られる。さらに検定員になると，検定することができるということも意欲につながっていると考えられる。またほとんどの児童がリコーダーの音色や演奏することが好きであるため，一人でも楽しんで練習している。従って，全体的に技術的なレベルは高く，リコーダーを用いてオブリガートをつけたり，簡単なメロディの創作などでは，比較的容易に活動ができる。しかし，この検定員制度にはいくつかの問題点がある。自主的な学習活動であるため，技能的に個人差が大きいのが課題の一つとして挙げられる。また，検定員になってしまうと，そこで満足し，さらに難易な曲に挑戦しようとか，努力して習得した技術をさらに発展させようという機会がない。さらに，検定員制度は個人の技術の習得・向上を目的としているため，テキストではアンサンブル用の楽譜にはなっているが，各パート毎にソロで検定していくため，友だちと合わせて楽しんだり，ハーモニーの美しさを楽しんだりすることが少ないという現状である。

　中学校では，入学当初からアルトリコーダーを学習している。ソプラノリコーダーより音域が低く，人声に最も近い楽器といわれている。既習のソプラノリコーダーと運指が異なるため，初めは戸惑う生徒もいたが，２年生にもなると，ほとんどの生徒がソプラノとアルトの運指を自由に切り替えて演奏できるようになってきた。従って，アンサンブルの中で，ソプラノとアルトのみならず，ソプラノと運指が同じテナーやアルトと同じバスリコーダーも加えた幅広い楽しみ方ができるのである。

(2) リコーダーの特質は，時と場所を選ばず，気軽に演奏でき，音楽を楽しむことができることにある。そして，誰とでも何人でも一緒に音楽を楽しみ創っていくことを通して，音の広がりや重なりの美しさを感じることができる。さらに，演奏を通した人とのかかわりの中で，自分のよさに気づき，自分の感性を磨き，表現できる児童・生徒が育つものと考えている。

　そこで本題材では，前述の検定員制度を有効に利用し，自分が習得した技術を用いて，友達とアンサンブルを楽しむ活動を取り入れた。中学年になると，児童は友だちと協力して集団で学習を進められるようになり，合奏や小アンサンブルの活動ができるようになってくる。そのような学習活動の中で，児童の『音楽を聴き取る力』が高まり，互いに音を合わせたり，音の重なりのおもしろさや広がり，美しさに気づいていけるようになる。このような発達的特性から，人とのかかわりの中で音楽的な資質や能力を育てる授業を構築していきたいと考えた。

　学習指導要領の学年の目標では，中学年は「音楽の美しさを感じ取る」（高学年は「喜びを味わう」），「音楽の美しさを感じ取って聴き」（高学年は「美しさを味わって聴き」），中学校第２学年では「楽曲構成の豊かさや美しさを感じ取り」と示してあるように，児童・生徒の音楽的な感受を十分に伸ばしていかなければならない。従って，児童・生徒が自らの感性を生き生きと働かせ，音楽を豊かに感じ取り，自分の思いやイメージを十分に膨らませ表現できるような学習活動を展開しなければならない。例えば，児童・生徒が興味・関心をもった音楽に対して「この音楽のこのリズムがおもしろい」，「この楽器の音色は○○だ」，「楽しそうな（悲しそうな）曲だね」といった，音楽的特徴を自分の感性で感じ聴き取る力を育て，そこで感じたことをもとに，「こんな音楽にしてみたい」とか「このメロディは弾んだ感じで，

ここはなめらかに演奏したい」といった自分の思いを膨らませ，それを自分なりに工夫して表現しようとする力を育てたいと考える。そこでは，中学生の楽曲を感受する鋭い感性と楽曲構成に対する理解力が演奏を支える柱となってくる。中学生にとっては，小学４年生と共に学習することで，時には学習を通して，新鮮で新たな感動を得たり，時には指導的な立場で小学生にかかわり，対旋律やオブリガートをつけたり，テンポや強弱などの表現を工夫したりすることで，厚みを増したより美しいハーモニーを創ることができるものと期待する。

(3) 本題材では，技能的に同レベル同士でグループを作る。このことにより，すべての児童・生徒が背伸びすることなく，また無理をして相手のレベルに合わせることもなく安心して取り組むことができる。そして技能のレベルにかかわらず，美しいハーモニーの心地よさを感じ取り，楽しさを味わうことができる。このような学習活動を展開していくことにより，友だちと音楽を創っていくことの楽しさや，「私はこういう音楽を創りたい。そのためにはこういう技術を身につけなければならないんだ。」という意欲を生み出すものと考える。

本時は，第３次１時間目にあたる。前時の学習の反省をもとに，さらに練習を重ねる中で，児童・生徒が互いに意見を出し合い，曲想を考えて音楽を創っていく活動をさせたい。従って，発表の際には，各グループがどのような工夫をしてアンサンブルを創っていったかを説明させ，それぞれの思いを取り入れた演奏を発表する。中学生には，小学生の曲に対する思いを引き出しながら，曲にあった演奏法を考え，まとめていくことを期待したい。指導者は，所属の児童生徒にかかわらず，すべてのグループの状況を把握しながら，アドバイスをしたり見守ったりしていきたい。

3 活動展開計画（全５時間　本時５／５）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	選曲をする 美しい音色や基礎的な奏法に気をつけて，演奏する。	1 2	㊥グループごとに技術的レベルにあった選曲をする。 ㊥㊦自分のパートを，正しく演奏する。 ・正しい運指で演奏する。 ・きれいな高音が出せるようにサミングを工夫する。 ・息の強さに気をつけて演奏する。 ・スタッカートやテヌート，ディミヌエンド，リタルダンド等の記号の意味を理解して演奏する。
2	曲の表す気分を感じ取って，イメージを膨らませながら，旋律の演奏の仕方や音の出し方を工夫する。	3 4 (合同)	㊥㊦互いの音を聴き合いながら，旋律を重ねることを楽しむ。 旋律の流れや変化を感じ取り，イメージ創りをしながら演奏の仕方を工夫する。 ・旋律から場面を想像したり，どんな気持ちで演奏したらいいか考えながら演奏する。 ・イメージをもとに協力して演奏する。
3	複数の旋律が重なり合う響きの美しさを感じ取り，楽しんで演奏したり聴いたりする。	⑤ (合同)	㊥㊦互いの演奏を発表しあい，友達の演奏の仕方や表現のよさに気づく。 ・互いの旋律を聴き合いながら演奏する。 ・リコーダーの響きや旋律の重なりを感じ取って演奏する。 ・アンサンブルの美しさや，表現のよさを感じ取って聴く。

4 本時の学習

(1) ねらい　(小学校)複数の旋律の重なりや音の広がりを楽しんで演奏し，聴き合うことができる。
(中学校) グループをまとめ，より美しい演奏を創り上げることができる。

(2) 展　開

学習場面と子どもの取り組み		教師のはたらきかけと願い
小学生	中学生	
1前時の活動を振り返るとともに，本時の学習のめあてを確認する。		前時に，初めて一緒に合わせた時や中学生の演奏を聴いた時の感想を紹介し，意欲づけをするとともに，今日のめあてを提示する。(T1・T2)
曲のイメージにふさわしい演奏になるように，みんなで表現を工夫しよう		・低音が入ると気持ちよかった ・ソプラノリコーダーだけよりいい感じ ・かっこいい ・私も吹いてみたくなった ・吹きやすかった
2 グループ練習をする ・特に苦手な部分を克服するように練習する。	2 グループ練習をする ・演奏全体を聴きながら，表現の仕方をアドバイスする。	積極的にグループ活動ができるように巡視し，アドバイスをする。(T1・T2) 互いの音を聴きながら演奏させる。 ㊥わからないところは中学生に教えてもらうように指示をする。 ㊥前時よりさらにイメージにあった演奏になるよう改善点を指摘し，演奏につなげる。また，小学生の意見も取り入れるようにさせる。
3 グループ毎に発表する。		自信を持って演奏させるようにする(T1・T2)
自分たちのイメージや表現方法を説明して，演奏を発表する。		
中学生の指示で演奏を始める。	中学生がリードし，小学生が安心して発表できるような配慮をする。	
4 振り返りカードに感想を書く。		今日の演奏だけではなく，一緒に音楽を創ってきたことについても振り返らせる。(T1・T2)

■分科会の整理と総括■

1．参加者自己紹介
2．授業公開者発表（授業の考え方やねらい等）＜小林佳子　今岡正治＞
3．幼小中一貫教育に向けて
＜今岡正治＞
今回は、テーマに向かっての研究会ではなく、今後どう一貫教育を進めていくかの取り組みであり、お互いの交流をしようとしてきたことについての趣旨説明。
※パワーポイントを使ってリードの説明。
・現状と課題
・一貫教育に向けて大切にしたいこと

4．実践発表　【中３選択音楽　ミニコンサートをプロデュース】
＜小村　聡＞
○ねらい
・生徒の音楽への関心の高さをさらに深め、広める。
・演奏する喜び、できる喜び、さらに音楽をしたいという思いをもち、聴いてもらう喜びを次への意欲につなげる。
○授業構想
一貫教育も生かし、中学生への憧れがもてるように、小学生に聴いてもらうという形をとり、聴衆を意識したコンサートを行う。コンサートは、中学生が役割分担し、プロデュースしていく。
○中学生の様子　※コンサートの様子をビデオで説明をする。
選択音楽を２０名の生徒が希望した。コンサートの企画を立てていく中で、対象が小学生であることを意識した内容になっていき、夏休みに自主的に練習する姿も見られた。コンサートは４５分間で、選曲、司会も生徒が行った。コンサート終了後の生徒の感想文からは、演奏する喜び、音楽の楽しさを味わえたことが伺えた。

5．質疑応答、意見交換
・楽器を教えることの永遠の課題を感じた。タンギング、音の処理の仕方なども気をつけるといいのではないか。中学生が小学生に教えてはいるが、苦労もしていて、試行錯誤する姿が印象的であった。
・細かい運指の間違い、サミングの間違い（指をずらしている）、細かい音符になるとテンポが速くなるなどの姿が見られた。せっかくよく指が動いているので、そういうところもさらに指導していくともっといい音楽ができるのではないか。
・あそこまでできれば、次の段階へ進めると感じた。教師が「こう吹くともっとかっこいいよ」などの助言をしており、今後の取り組みに期待している。
・今後は、いろいろなクラスでの交流をしていきたい。３学期は、中２選択音楽の後半があるので、４の１との交流を考えている。今回は４年生だったが、それを５年生、６年生と続けていけたらと考えている。
・指導者の言葉かけの中で、「どの人も上手でも下手でもいろんな楽器があるのがいいよね」という言葉や、「中学生が小学生にリクエストして」というリクエストするという表現が印象深かった。
・一貫教育を進めていく中で、どういう交流ができるのか、発達的に違うところもあり、どの学年を組み合わせていくのかも、問題になってくる。小、中それぞれのねらいがあり、どう評価していくのか、限られた時数の中でどう指導していくのか、考えなければいけない。
・中学生に対しては、コミュニケーション能力が重視されていたと思うが、音楽科としてはどうであったか、よく見えてこなかった。
・交流学年については、音楽教員がどの学年に配置されるかに左右される。アンサンブルをつくるには、コミュニケーション能力はもとより、自分の経験をもとに音を作っていくスキルが必要である。自分ができることをする、それを伝えることを大切にしたい。中学生の評価の観点としては、自分なりに考え、工夫したり、直したりすることができるということをあげている。

・４年生は、中学生に教えてもらい、認めてもらい、満足しているようだったが、中学生は苦戦しているようだった。伝えることも大変で、イメージに近づけるためにどうすればいいのか、分かっていても、言葉、技術が伴わず、うまく言えないのではないか。「もっとつなげて」とか「音をきって」とか、どういう技術がイメージの変化につながるか、どうすればいいのか教師がもっと入ってもいいのではないか。教師の助言、指導が必要だと感じた。
・「待つ」ことで、中学生と小学生が作ることを大切にしたかったので、教師が入り過ぎないようにした。お互いが仲良くならないとできないことだが、中学生に任せ、言葉が出てくるのを待った。
・島根小・島根中は、近くに一つずつしか学校がなく、どういう一貫ができるか、大きな問題である。小学校でどこまでさせるのか、どうつなげていくのか。また、できていたことができなくなるといった問題もある。例えば、身体が硬くなるとか、歌を歌わなくなるといったことである。
・小、中の合同授業の成り立ち、一貫としてどうなのか、ということはあるが、お互いに教育的意義はあるといえる。湖南中学校では、近隣の中・高・大で連携を図っている。高校からも授業をしに来てもらっている。しかし、連携はできるが、一貫とは違う。一貫教育をするとなれば、もっと何か大きなことが必要ではないか。システムを変えるとか、カリキュラムをどう変えていくか。学習指導要領に沿ってやっているのであろうが、特区申請もある。指導案の書き方も、もっと一貫としてのねらいがほしい。単元目標や評価の観点、目標に対する教師の働きかけもあるといいのではないか。